

# 今回取材した子ども記者たち



なごやしりつ  
名古屋市立  
豊岡小学校6年  
ただとこ  
**武田知子さん**

かすがいしりつ  
春日井市立  
篠原小学校6年  
のだりりい  
**野田莉里さん**

みはまらりつ  
美浜町立  
河和南部小学校6年  
あちわりゅうや  
**阿知波龍矢くん**

とよはしりつ  
豊橋市立  
汐田小学校6年  
おがわはる  
**小川陽くん**

あんじしりつ  
安城市立  
安城東部小学校6年  
きとろ  
**佐藤すずさん**

しろかわらりつ  
白川村立  
白川郷学園6年  
たぐちこはる  
**田口心春さん**

つしりつ  
津市立  
南立誠小学校6年  
はやしたくと  
**林卓杜くん**

おかさきしりつ  
岡崎市立  
上地小学校6年  
あかやおおすけ  
**赤谷大祐くん**

とよたしりつ  
豊田市立  
梅坪小学校6年  
うえだみな  
**植田美菜さん**

おおほらりつ  
大垣市立  
江東小学校6年  
たけやまこうのすけ  
**竹山孝之介くん**

つしりつ  
津市立  
修成小学校6年  
みやたかずき  
**宮田和京くん**

## みんなもいっしょに考えよう!

とうかいちいきうそだめいこまじゅ  
東海地域で生まれ育った11名の子ども記者たち。今年は、彼らが生まれる前に発生した阪神・淡路大震災の被災地と2年前に発生した熊本地震の被災地取材した。どちらも東海地域から随分離れた場所で起きた災害である。

さいがいさくじぶん  
災害対策は自分が生まれる以前のことから学ぶこと、他の地域から学ぶことが欠かせない。しかし、子ども記者たちはそれが非常に難しいということ、最初の取材先となった岸本さんから学んだ。岸本さんは、阪神・淡路大震災を小学2年生の時に経験した。影響が小さかった神戸の親戚の家に身を寄せた。そこで通った学校の児童から「学校が休みになっていなあ」と言われた。親戚の家では、当たり前のように

あたたなべたあまえく  
に温かい鍋を食べた。当たり前暮らしが続いていると、被災地が大変な状況になっていることを想像することは難しい。自分が被災したらどうなるかを想像することも難しい。子ども記者たちは、自分たちの挑戦がいかに難しいことであるかをいきなり思い知ることになった。

しかし、彼らは神戸の「風の家」で、熊本城で、布田川断層の上で、益城町役場で、仮設団地でたくさんの話を聞き、色々なものを全身で感じ、たくさんの「自分たちが住んでいるまちもこんなだったらいいのに!」という思いを記事にしてくれた。両被災地では、2度と同じ被害が繰り返されてはならないという多くのひとの思いが復旧・復興の源となっていた。もちろん、絶対に正しいという答えが見つからない問題もある。その難しさに気づいている記者もいたようだ。それでも、災害を経験す

る前から「自分たちのまちも〇〇であって欲しい」と思うことが、自分が生まれる以前のことから学ぶこと、他の地域から学ぶことの第一歩であることは間違いない。

東日本大震災の翌年に始まった「子ども新聞プロジェクト」。今年で7年目を迎えた。70人ほどの子ども記者たちとそれを読んだ何百万人にも及ぶ読者がこれから次々と成人していく。「自分たちのまちもこうなればいいのに」が実現していくのが待ち遠しい。



かんさいだいがくしゃかいはんぜんがくぶじゆんまうじゆ  
関西大学 社会安全学部 准教授  
おくむらよしひろ  
**奥村 与志弘氏**  
1980年生まれ。2008年京都大学大学院修了、博士(情報学)取得。人と防災未来センター(神戸市)を経て、12年に京都大学大学院助教、17年4月より現職。東日本大震災では政府現地対策本部に入ったほか、愛知県栗原市の防災会議委員も務める。